

日本語を第二言語とした意味推測研究の動向と課題

林柏達（九州大学大学院）

1. はじめに

□ 背景：

- L2学習者は膨大な語彙を身につけるために、「語の意味推測」というストラテジーが重要
- 日本語は漢字語彙、複合動詞、慣用句など、様々な語のタイプが存在している。
- 語のタイプによって異なる意味推測活動が行う。
- L2学習者の付随的な語彙学習で行われる意味推測の効率を向上させるために、語のタイプ別に行われた意味推測研究を整理する必要性がある。

□ 目的：

「未知漢字語彙」、「未知和製英語」、「未知複合動詞」、「未知多義語」、「未知慣用句」という「語のタイプ」の観点から日本語をL2とした意味推測研究を概観し、これまでの研究成果を整理し、残された課題を確認することを目的とする。

2. 結果と考察

□ 従来研究の対象語：

- 当初は漢字語彙を中心に行われていたが、その後、和製英語、複合動詞などの語についての研究もある程度進展している。

□ 従来研究の測定形式：

- 多肢選択式テスト、発話思考法、口頭あるいは記述で意味を答えるという測定形式がよく用いられる。
- 特に「多肢選択式テスト」が最もよく使われる。
- 測定形式によって、意味推測の結果が異なる。

□ 従来研究の注目点：

- 意味推測の正確さに影響する要因
- 意味推測における手がかりの利用状況
- という2つの側面から検討されている。

□ 考察：

- 語の意味推測は単純な一方向的な過程ではなく、学習者が持つ多様な知識と、文脈や単語から得られる情報を組み合わせることで行われる、複雑かつ困難なプロセスである。
- この過程において使用される手がかりや、推測の正確性には主に以下の2つ要因種類がある。
 - ①学習者自身の言語能力や認知能力などの個人差に関わる「学習者要因」：「L2習熟度」、「語彙知識」、「母語背景」、「滞日経験」など
 - ②未知語の特徴および関連する場面や状況に関わる「テキスト要因」：「語のタイプ」、「語の透明度」、「語と母語の対応（概念および形式）」、「文脈量」、「文脈情報量」、「テキストの内容理解」など

3. 今後の課題と参考文献

- 1)漢字語彙以外、和製英語を代表とした様々なタイプの語を対象に更に研究を進めること。
- 2)正確な意味推測のために必要な文脈の特徴や、語彙の特徴によって求められる文脈の質と量についてをさらなる解明すること。

<参考文献>

- 崔娉（2015）「日本語の未知漢字語彙の意味推測に見る中国語を母語とする学習者の推測手がかりの利用—漢字語彙の日中対応関係及びL2習熟度の観点から—」『言語文化と日本語教育』50, 61-70.
- 徳田恵（2006）「読解における未知語の意味推測と語彙学習」『言語文化と日本語教育』2006年11月増刊特集号, 10-30.
- Kaivanpanah, S. & Alavi, S. M. (2008). The role of linguistic knowledge in word-meaning inferencing. *System*, 36, 172-195.